早稲田大学繊維研究会
「編み目に浮かびながら」
Seni 2023 Fashion show “Laminar Weave”

私は、私の小さな流れの上に浮かんでいる。
同時に、私たちは、私たちの大きな流れの上に共に浮かんでいる。

19 世紀中頃の日本開国以降、「ジャポニスム」と言われる日本の「美」に焦点が当てられた流行が勃興した。以来、日本美術が大きな注目を浴びるようになった。19 世紀オートクチュールの創始者ウォルトのケープ型コートには、日本の兜や枝垂桜が刺繍され、リンカーのイヴニング・コートには浮世絵に描かれた花魁、或いは歌舞伎役者の打掛を想起させるシルエットが採用されていた。こうした服飾におけるジャポニスムは現代になり、「ネオ・ジャポニスム」と呼ばれるようになる。鷲田清一は、ネオ・ジャポニスムを三宅一生や川久保玲等といったデザイナーたちの作品が、ヨーロッパのモードに及ぼした影響であると定義した。その後も、裏原や Y2K と呼ばれるものが世界中のファッション界に影響を及ぼした。

このように日本の「美」は、服飾界に多大な影響力を持つようになった。ただ、現代において着物や下駄がほとんど着用されないように、日本の「美」には大きな時代的齟齬が伴っているのではないだろうか。例えば、メゾン・マルジェラの 2016 年春夏のコレクションでは、メンズラインにて帯締めのようなベルトが用いられた。また、着物を現代的に引き継ぐ試みとして、浅井広海による 2020 年春夏のメンズコレクションがあった。ただ、いずれも日本の「美」を過去のものとして扱い、「道具」として用いているにすぎない。謂わば、半ば強制的に「過去」を「現代」の枠に当てはめようとしているのではないか。

本ショーでは、こうした日本の「美」に対して、日本人の視点から見つめ直す。一方で、先述されたように日本の「美」を過去のものといった「点」として扱うのではなく、今、これからも生きるものといった「大きな流れ」として扱う。日本の「美」、或いはそれを構成する世間といった「大きな流れ」を表現する上で、不可欠であるのが「小さな流れ」である。ここで言う「小さな流れ」とは、個人の経験や眼差し、相互性である。この「小さな流れ」を追憶することで、初めて「大きな流れ」について語ることができるのではないか。何故なら、大きな流れ〈日本の美や世間〉を構成するのは無数の小さな流れ〈個人の経験や眼差し、相互性〉なはずだからである。この「流れ」を巡る中で、日本の「美」を生きるものとして扱えるのではないか。

大きな流れと小さな流れはどこか「網目」を想起させる。すなわち、日本や世間といった大きな網目の中で個人の経験や眼差し、相互性といった小さな網目が交差しているのである。ただ、本ショーでは網目ではなく、「編み目」を用いる。「編」とは、「編む」だけでなく、「編」集も含意する。つまり、編集の意にみられるように、大きな「網目」をさまざまな視点で切り出し、異なる切り口同士を繋ぎ合わせる。そして、新たな日本の「美」や各個人の見方を示すものである。

私たちは、日本や世間といった「大きな流れ」の上を浮かぶと同時に、個人の経験や眼差し、相互性といった「小さな流れ」の上を浮かんでいる。こうした、大きな流れの「編み目」と小さな流れの「編み目」の間を、私たちが「浮かびながら」身を任せて巡る中で、自分にとって、或いは日本の「美」にとって大切な何かにふと気づくことができるのではないだろうか。

文＝西脇 怜央